

# 宣教140周年事業から学び、得られたこと

## 宣教の歩みを学んだ

140周年事業

パウロ 山本 元

### ◇節目の年の事業

永い教会活動の歩みには、時々節目の年がある。川越に宣教の種が蒔かれて140年にあたるこの年、一年をかけて種々な催し、行事が開催された。この中、資料保管委員会が担当してきた企画の一部を振り返ってみたい。

### ◇由緒あるところの訪問ツアー

この教会に関わる場所を訪れてみよう。「教会歴史散歩」を実施した。乗用車で廻る予定が32名の出席者でマイクロバスでのツアーとなった。教会創立者の田井正一師のお住まい、創立期の教会「本町教会」跡地、私立女学校・幼稚園旧設置場所、川越教会出身最初の聖職者大野要蔵師生家、教会草創期活躍された谷嶋静正氏宅とその墓地等々を訪問、用意された資料をもとに往時を偲び学ぶことが出来た。昼食は市内老舗料亭のお座敷を貸し切り懇談のひと時を持った。

### ◇先人の墓前で記念礼拝

田井正一師は当教会の他、神田キ

## 次の十年後までも 元気な教会で

フランシス 菊池邦香

2017年の半ばに宣教140周年記念実行委員会が立てられ準備が始まりました。各方面から企画案が出され、殆どが採用されさまざまな事が実施されました。140周年を節目として部制の見直しから始まり、選挙に関する内規も2018年の堅信受領者総会で改正されました。

その後、初代の田井正一司祭についての講演会、多文化共生のパネルディスカッションから始まり、10以上の企画が実行され、後半にはパイプオルガンコンサート、信仰の分かち合いの懇談会など、多彩なプログラムが年間を通して繰り広げられました。また10年間の歴史年表も発行されました。多くの学びあり、喜びありました。

特筆すべきは、従来の、年間宣教テーマを具現化させるために5カ国のパネルリストによる、パネルディスカッションが開催されたことでしょう。この会には信徒以外の方の参加もあり、知らなかった在日外国人の苦勞の一端と国家や自治体の政策の不備に気づかされました。この企画

は前年に行った春の講演会「謝罪と赦罪」、秋のシンポジウム「現代の社会において弱者をどう守れるか」〈ホロコーストのリハーサルから〉というクリス・ブリュンガー氏の発題が端を発しています。

現代社会は身体的、精神的、環境的、社会的な弱者が多く存在しますが、その人たちをどのように守るかを深く考えさせられる課題でした。その発題からパネルディスカッション「あなたがたに平和があるように」…多文化共生の社会へ…と繋がっていきました。川越市外国人市民会議の韓国出身の方も参加されました。私たちはキリストを通して、教会は困難な状況にある人々が慰められ、勇気づけられて、生き直していける場所であり、その人たちを支えるのが教会の使命であると教えられてきました。これからも、教会が続く限りこの使命は変わらないでしょう。長い歴史を学び直し、記念の企画がお祭りだけでなく、充実した催し物で満たされたことは神様の大きな恵みであったと感謝します。次の10年後まで、生き生きとした楽しいプログラムを毎年実施していく元気な教会でありたいと願っています。